

男優主演から女優主演へと映画の好みは推移しているか？

1180416 川人 将希

高知工科大学 マネジメント学部

1. 概要

映画の聴衆を惹きつける俳優の性別が、時代とともに、男性から女性にシフトしているのかを検証するために、1950年以降の映画の興行収入データを分析した。具体的には、各年の興行収入上位10位のデータを、男優主演と女優主演に分類し、それぞれが興行収入全体に占める割合を時系列で比較した。分析結果からは、一般的に主張されている傾向とは異なり、男優主演の映画の興行収入が高い割合を占めている現状が明らかになった。

2. はじめに

近年の映画視聴の現状は、次のとおりである。日本映画産業統計によると、現在、映画館として所有されているスクリーンは全国に3,525存在する。その内、一般館と呼ばれる映画館が独立しているもの（例：愛宕劇場など）で429、シネマコンプレックス（以下シネコン）と呼ばれる大型ショッピングモールなどの1つの建物の中に複数の映画上映場が併設されているもの（例：イオンモール高知など）で3,096ある。図1から、年々スクリーンの数は増えているが、そのほとんどがシネコンによるもので、一般館としてのスクリーン数は減少している。恐らく、シネコンでは上映作品の集客力に応じて、上映回数や上映期間を臨機応変に変えていくことができる。また、ショッピングモールに併設しているため、別の買い物ついでに足を運ぶ人も少なくないと考えられる。そのため、映画だけの魅力で勝負しなければならない一般館ではシネコン同等の客足を呼ぶことはなかなか難しく、閉館へと追い込まれてしまうだろう。

集客数の現状について、日本映画産業統計は、高度経済成長期であった1955年から1960年には集客数は著しく伸びていること、また、ピークの1958年には集客数11億人を動員したこと（この動員数は、当時の日本の人口の12倍にも及ぶ）、そして、それ以降は急激に集客数が落ち込んでいき、1970年から横ばいの状態となっていることを明らかにしている。その原因としてテレビの普及やレンタルビデオといった娯楽の誕生により、お金や時間をかけてわざわざ映画館へと足を運ぶ人が少なくなってしまったことが考えられる。

しかしながら、日本映画産業統計によると、ここ数年はシネコンの影響もあり、スクリーン数が増えたため上映できる作品数も増え、2017年は年間に上映された作品数が1187本で過去最大の本数となっている。たしかに、公開本数が多ければ良いというわけではないが、1本でも作品の選択肢が増えれば様々な客層を掴むチャンスに変わるかもしれない、1歩前に前進したと考えていだろう。ただし、スクリーン数と公開本数は増えているが、集客数は多少の増減はあるものの横ばいの状態が続いており、苦戦を強いられていることに変わりはない。

映画館の鑑賞料金については、現在、日本の映画館での鑑賞料金は大人1,800円、大学生1,500円、高校生以下1,000円となっている。それに加えてレディースデイやレイトショー、前売り券の販売といった割引サービスを行っている。この値段設定に対して日本人は高いと感じている人は多い。株式会社マーシュが行った映画に関するアンケート調査では、様々な年代の人に映画は観るが、映画館には行かない理由についてアンケート調査

を行ったところ、鑑賞料金が高いからと半数以上の人が答えている。この結果からもわかるように、1,800円も支払って映画館に観に行こうと考える人は少なく、その値段があれば自宅でレンタルした映画を数本観るほうがお得と感じるのかもしれない。

次に映画館の収入となるものについてみていきたいと思う。映画館の収入として一番に思いつくのが、上記でも触れたチケットの売上金による興行収入だろう。では、他にどういったものが売上げとなるのか。まず、コンセッション収入である。これは、食べ物やドリンクなどの飲食物による収入で、映画館にとって重要な収入源となっており、収益全体の40%を占めている。その中でも、ポップコーンは原価が安く利益率85%を誇っており、ポップコーンが映画館を支えているといっても過言ではない。次に、パンフレットや映画関連のグッズを販売するショップ収入。こちらもヒーロー映画やアニメといった熱狂的ファンを獲得する作品のグッズを販売する時は、1ヶ月の映画館の収益の半分を占めるときもある大事な収入源だ。最後にシネアド収入がある。これは映画上映前の企業の宣伝やインフォメーションによる収入で、映画予告は無料で流しているため収益にはならない。その他細かな収益はあるが、大きく分けると興行収入、コンセッション収入、ショップ収入、シネアド収入の4つの収益で映画館は成り立っている。そして、これらの収入はすべて結びつきで出来ているため、来場者が来なければ成り立たない。従って、映画館ビジネスはヒトが来なければ何も始まらないのだ。

映画視聴の推移については上記の通りであるが、その背景として、人々の映画の好みについても、次のような推移を経ているといわれている。それは、人々の映画の好みは、男優が活躍している映画から女優が活躍している映画へとシフトしているというものである。

その背景としては、戦後、女性の社会進出がより促進され、視聴する映画でも、そのようは社会背景が反映された映画を見たい、という好みが見れているとの指摘がされることがある。もしそのような好みの変化が現実のものであるならば、ヒットした映画での女優比率が上昇しているはずである。果たして、そのような変化は実際に見られるのであろうか。そのことを明らかにするために、本研究では、1950年以降の映画の興行収入データに着目し、各年の興行収入上位10位のデータを分析対象とする。男優主演映画がヒットしているのか、女優主演映画がヒットしているのかを明らかにするために、それらの映画を男優主演と女優主演に分類する。そして、男優主演映画が興行収入全体に占める割合が、時代とともに減少しているのかを検証した。

分析結果からは、一般的に主張されている傾向とは異なり、男優主演の映画の興行収入が高い割合を占めている現状が明らかになった。すなわち、人々の好みの変化は、少なくとも興行収入の増加という形では反映されていないことが明らかになった。

本論文の構成は次のとおりである。次節では分析対象となるデータについて説明し、第3節では分析結果を説明する。最終節では、その結果を議論する。

3. データ

近年、アナと雪の女王という映画が大ヒットしたことは記憶に新しいだろう。この映画では、姉妹のありのままの大事さが描かれ、日本興業収入第3位となる大ヒットを記録した。さらに、この映画の中で歌われている、**Let it go** は社会現象を巻き起こし、紅白歌合戦など年末の歌番組では引っ張りだこだった。他にも、美女と野獣やワンダーウーマンなど、今までは男性が演じることが多かった役柄を女性が演じることが多くなっており、それがヒットにつながっていると感じられる。

また、2010年以降のピープルチョイスアワードで

は、8 作品中 5 作品で女性が主人公を演じており、女性主演の映画が好まれているのではないかと考えられる。

4. 結果

分析結果からは、男優主演映画の興行収入は、以前と変わらず高い水準であることが明らかになった(図 1)

横軸は、西暦での年を表す。最も古い年が 1950 年、最も新しい年が 2016 年である。縦軸は次のようにとられている。分析対象は、各年の興行収入トップ 10 映画を分析対象とする。まず、それらの興行収入の合計額を求める。次に、トップ 10 のうち、男優主演映画の興行収入を合計し、それを、先ほど求めた、その年のトップ 10 の総興行収入で割る。こうして、興行収入トップ 10 に限定してではあるが、男優主演映画が興行収入に占める割合を求めることができる。逆に、1 からその割合を引いた値は、女優主演映画が興行収入に占める割合を示すことになる。

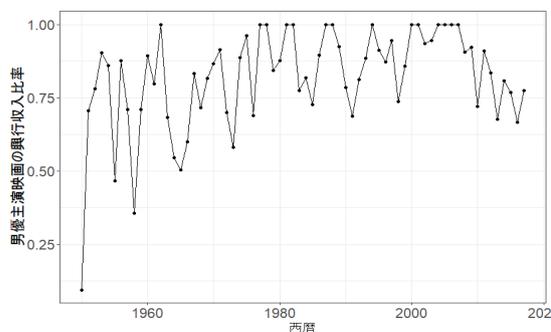


図 1. トップ 10 映画の男優主演映画興行収入比率

図からは、1950 年から 1980 年頃は、若干の右上がりの傾向、すなわち、より男優主演映画が好まれていく傾向が観察され、また、それ以降は横ばいになっている傾向が見られる。ただし、2010 年頃からは、若干、女優主演映画が占める割合が増えていているようにも見えるが、期間が短いため、定かではない。

期間を区切らず、1950 年から現在までの、全体的な傾向をみると、やはり、男優主演映画が興行収入の大部分を占めており、その割合が減少しているようには見えない。すなわち、時代とともに、女優主演映画が好まれていくという傾向は観察されなかった。

5. 議論

本研究は、女性の社会進出とともに、好まれる映画が、女性が活躍する映画へとシフトしているのを検証するために、1950 年から 2016 年までの興行収入トップ 10 映画に着目し、女優主演映画の興行収入に占める割合が増加しているのを検証した。分析結果からは、時代とともに、女優主演映画が好まれていくという傾向は観察されなかった。すなわち、女性が活躍する映画へと、人々の好みが推移していく傾向は観察されなかった。

その理由としては、次のことが考えられる。

男性、女性の俳優の数に差があり、女性の方が明らかに少ないことが原因なのではないかと考えられる。もしも、男女間の俳優の数が同じならば、結果は変わっていたかもしれない。

今後の研究として、今回は世界全体の興行収入でみたが、映画大国のアメリカや映画産業の発展が著しい中国やインド、そして、日本でも調査をし、結果の違いを調べてみたいと考えている。

6. 出典

- ・歴代映画興行収入ランキング

https://entamedata.web.fc2.com/movie/all_w_movie.html

- ・60 年余りの間の映画館数の変化をグラフ化してみる (2017 年) (最新) - ガページニュース

<https://money-goround.jp/article/2017/10/25/5322.html>

- ・ライフメディア リサーチバンク調べ

http://research.lifemedia.jp/2013/02/130227_movie.html

- ・一般社団法人日本製作者連盟

<http://www.eiren.org/toukei/data.html>

- ・ICT 総研調査

<https://av.watch.impress.co.jp/docs/news/1096688.html>